

I 学校の概要

読解力向上推進モデル校事業

坂出市立川津小学校

◆児童及び教員数

○児童生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	特別支援	全 校
2学級 36名	2学級 45名	1学級 34名	2学級 38名	2学級 60名	2学級 43名	2学級 9名	13学級 265名

○教員数 22名

◆学校の特徴

昨年度、本校は香小研国語科研究会の開催にあたり、「主体的に考え行動する児童の育成～ことばのよさを感じ、ことばで思いを表現する授業づくり～」を主題に掲げ研究を進めてきた。児童の大きな課題である語彙力や言語能力の弱さを改善してより主体的な学びに向かうために、「ことば」のもつ力やよさに着目し、想像を広げながら読む活動や、表現を工夫して書く活動、考えを伝え広げる話し合い活動を重視した授業づくりに取り組んだ。研究の成果として、児童が自分の考えを伝えたいという思いをもち、スムーズな交流活動に結びつけられるようになったことが挙げられる。その基盤の一つに、朝の常時活動でペアやグループで話をつなぐ対話トレーニング「お話チャレンジ」の取組を継続してきたことがある。実践を通して、対話により自分の考えが相手に伝わる喜び、そして自分の考えが広がっていく楽しさを、多くの児童が実感できている。

II 研究主題等

研究主題

主体的に考え、行動する児童の育成

～読解力を高める指導を通して～

◆研究主題設定の理由

昨今、「PISA 型読解力（自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、社会に参加するために、テキストを理解し、利用し、評価し、熟考する能力）」の低下が問題視され、その改善に向けた具体的な取組を行うことが重要課題の1つとなっている。それは本校児童においても同様であり、県学習状況調査では、例年、文章の読解や記述に関わる問題の正答率が特に低い傾向にある。その原因として、文章解釈の不十分さや、考えや理由を明確に論述する力の弱さが挙げられる。昨年度までの研究で、児童の学習意欲の向上や話し合い活動の活性化が成果として見られた一方で、書かれたテキストを理解する力や自分の考えを形成して書く力といった、学力の基盤となる読解力の育成においては大きな課題が残った。そこで今年度は、より児童が主体となり自らの課題解決のために学びを深めていくことができるよう、「読解力向上」を研究テーマに据え、授業改善の道筋を探っていくこととした。

◆研究内容及び方法

本校では「読解力」を「文章や図表などの意味を正しく理解し、必要な情報を自らの知識や経験に位置付けて考えを形成し、適切に表現すること。」と定義した。読解力を高めるための指導においては、この定義に基づく3つのプロセスを段階的に取り入れた授業を構成することが重要である。また、読解力を支えるための基盤として、文章を読み解くためのスキルである「汎用的基礎読解力」（新井紀子「AI に負けない子どもを育てる」より引用）を身に付けていく必要がある。以下に、読解力を高めるための3つのプロセスについて、そして、「汎用的基礎読解力」を身に付けるための常時活動について述べる。

(1) 読解力を高める3つのプロセス

【プロセス① 文章や図表などの意味を正しく理解する】

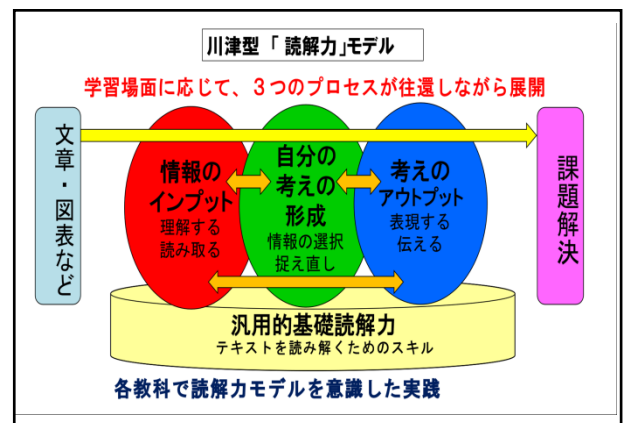
ことばの意味や文の構造を理解したり、グラフや図などの資料の数値を正確に読み取ったり等、インプットするための手立てとして、「必要な言葉や数値に線を引く」「図式化して構造化する」「言葉の意味を調べる」といった具体例が挙げられる。その際、線の色や引き方、印の付け方、図表の書き方等、教師の指示を明確にした上で発問し、正しい文章や図表の解釈につなげていく。それらの活動が困難な児童に対する支援として、「非言語情報（図、写真など）を提示する」「情報量を減らした文章や図表を提示する」「読み取りやすくするための補助線を引く」といった具体例が挙げられる。自力解決が難しい児童それぞれの課題を教師が見取り、必要な支援を講じることで、どの児童も意欲を保ちながら学習できるようにする。

【プロセス② 必要な情報を自らの知識や経験に位置付けて考えを形成する】

文章や図表などを読んで分かったことの中から、課題解決に結び付く情報を選び出していく際には、「学習課題が児童の目的と一致しているか」が重要である。必要な情報を選択できない児童には、情報量を制限したり、学習課題に立ち返って発問を精選したりして、必要な情報を絞らせるようにする。そして、それらの情報の共通点や相違点を見付けて関連付けたり、「～でなかったら」「もし～だったら」といったように批判的・仮定的に読み解いたりして考えながら、情報を意味付けていく。

【プロセス③ 適切に表現する】

読み取った情報や形成された考えをさらに自分の中に落とし込むには、それらを適切にアウトプットする場が必要である。なぜなら、自分の考えを書いたり話したりしようとする過程の中で、曖昧だった概念が論理的に整理され、再構築されるからである。また、自分の考えを明確に伝えるにはどの手段を用いると効果的か、相手意識をもつことも重要である。「書く・話す・示す」といったあらゆるアウトプットの手段を用いて表現することを繰り返し、読解力を育成していく。



(2) 汎用的基礎読解力を身に付けるための常時活動 (朝のチャレンジタイム)

昨年度まで、朝のチャレンジタイムで、「読書・書く・話す」を中心に言語能力向上のトレーニングを実施した。今年度はそれに加え、児童の読解力を支えるスキル（汎用的基礎読解力）を身に付けるため、右に示した①～⑥の視点を踏まえた活動を取り入れ、「読み解くチャレンジ」を定期的に取り入れていく。文づくりのゲームを通して文の構造を把握する感覚を養ったり、新聞記事などを読んで内容を簡単にまとめたりといった活動を行う予定である。昨年度のチャレンジタイムについての児童アンケートによると、9割以上の児童が「楽しかった」と答えた。問題に対する正答を求める活動ではなく、思考や会話、交流を重視したことにより、そのような結果となったのではないかと考える。今年度も、児童が楽しみながら、読解力向上につながる活動を工夫して実践していきたい。

【汎用的基礎読解力の六つの分類】

- ① 係り受け解析…文の基本構造（主語・述語・目的語など）を把握する力。
- ② 照応解決……………指示代名詞（これ、それ、あれ、これら等）が指すものや、省略された主語や目的語を把握する力。
- ③ 同義文判定……………2文の意味が同一であるかどうかを正しく判定する力。語彙上の言い換えや、受動態可能動態か、等。
- ④ 推論……………小学校6年生レベルの基本的な知識と日常生活から得られる常識を動員して、文の意味を理解する力。
- ⑤ イメージ同定…文章を図やグラフと比べて、内容が一致しているかどうかを認識する能力。文章で表現された内容と図が対応しているか見極める。
- ⑥ 具体的同定……………言葉の定義を読んで、それと合致する具体例を認識する能力。辞書に書かれているような定義文を理解し、具体的な例がそれに当てはまるか判定する。

III 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

I 読解力向上のための授業実践

1 プロセス①〔インプット〕に重点を置いた授業づくり

(児童質問紙) 授業や普段の生活の中で、分からないことについて、本や資料から調べようとしていますか。

指標4 「①できている+②だいたいできている」の合計



【指標の達成に向けた実践】

(1) 第1学年国語科「いろいろなふね」

本時の授業構成を読解力モデルに当てはめ、右のように示した。(図1) 本時では、漁船の役目とつくりを読み取り、その情報から新たな気付きを得て思考を深めていく学習であった。低学年の国語においては、語彙や経験の少なさから、書かれていることに対するイメージを膨らませることができず、インプット段階に大きくつまずきがあることが想定された。例えば、漁船は何のための船か、漁船には何があるのか、どの文章や言葉に大事なことが書かれているか、といったことである。そして、考えの形成の場面においても、機械や網についてのイメージがもてないのではないかと考えた。

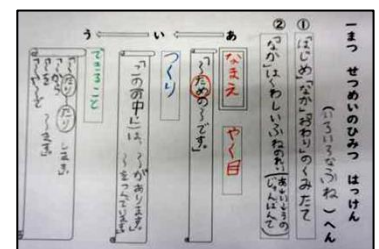
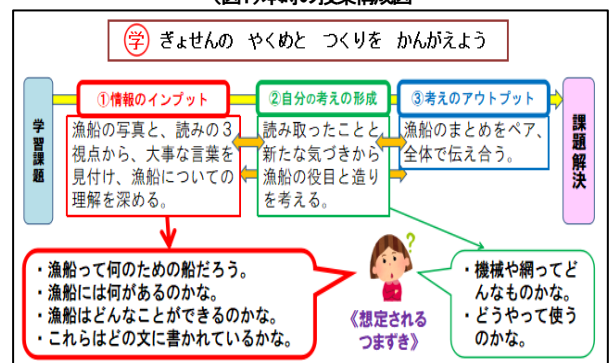
それらのつまずきを解消する手立てとして、まず、インプットの場面においては、文章を丁寧に読み取り、共有する時間を確保した。説明の秘密発見カード(図2)を使い、説明文の読み取りの基礎となる重要事項をおさえた。これにより、どの言葉や順番に注目するといった、明確にすることができた。また、「います。」を短い言葉でまとめると、「いる。」となることや、「ための」の言葉は、役目を表す言葉といったことも、全体で確実におさえていくことができた。

また、船についてより理解を深めたり、最終の言語活動である乗り物カード図鑑を作成する材料探しをしたりするために、図鑑で情報収集する時間を十分に取った。(図3) このように、短い文章や言葉をていねいに読むことや、文の構造の基礎を押さえていくこと、言葉と情報を結び付けていくことが、読解力の基本になり、低学年の国語科においては非常に重要なプロセスであると考えた。

そして、読み取った情報をもとに思考を形成する場面では、具体的に「魚の群れを見付ける機械」や「網」がどのようなものか考えを深めるために、自分の考えを図と言葉で表し、思考を整理した。(図4) さらに、全体交流で、図に描いたことを説明し、板書で示すことによって言語化していった。これらの活動によって、漁船の「役目」や「つくり」という言葉の意味が、より具体性をもって理解することにつながった。

課題として、知識や語彙力の乏しさにより、絵と言葉が繋がらない児童に対する支援策を、より具体的に講じていく必要性が挙げられた。

(図1)本時の授業構成図



(図2)説明の秘密発見カード



(図3)図鑑で情報収集する児童



(図4)「魚の群れを見付ける機械」や「網」を図に表したカード

(児童質問紙) 本や資料などから分かったことを、文章に書いたり、発表したりするなど、自分の言葉で表現していますか。

5月調査 48.0% → 目標値 55% → 11月調査 66.5%

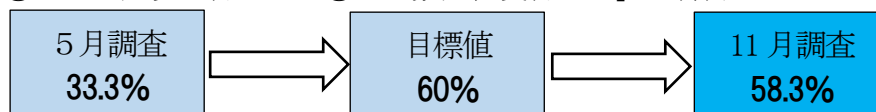
課題として、発達段階に応じた効果的な思考ツールの使用法が挙げた。様々な実践から、今後も研究を深めていきたい。



3 プロセス③【アウトプット】に重点を置いた授業づくり

(教師質問紙) 教科書以外の文章を読んで、書かれている内容やそれに対する考えを話し合う場を設けていますか。

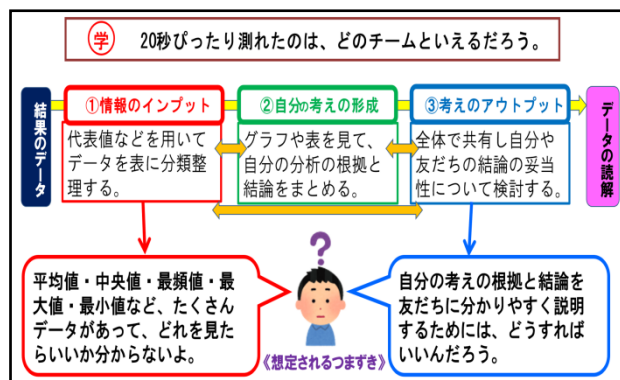
指標10 「①週に1回以上行った+②月に数回程度行った」の合計



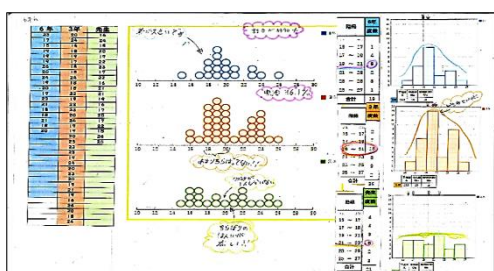
【指標の達成に向けた実践】

(3) 第6学年算数科「データの整理と活用」

本時は、20秒ぴたりチャレンジのデータを分析し、自分が優勝だと思うチームの根拠を話し合う学習であった。扱うテキストは、結果のグラフや表などのデータで、読解力育成の場面を右図(図9)のように構成した。想定されるつまずきは、膨大なデータを整理して、正しくインプットすることが難しいことと、自分の考えの根拠と結論を、友だちに明確に説明することであった。よって、まずはデータをきちんと整理することと、考えを明確に示し、交流におけるアウトプットを円滑にするための手立てが必要だと考えた。



(図9)本時の授業構成図



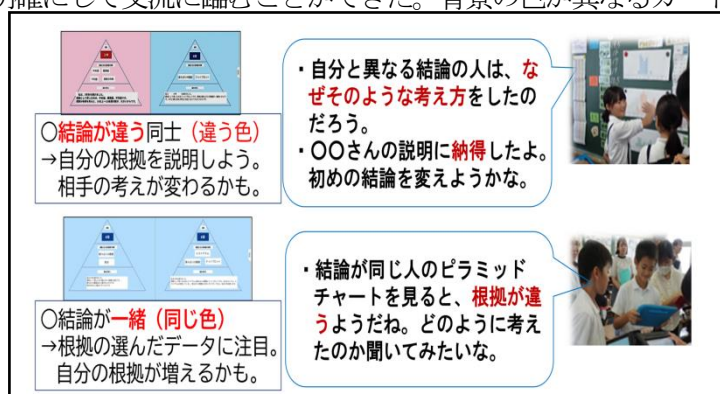
	6年生	3年生	先生
平均値	19.5	20.5	20
中央値	19	20	20
最頻値	18	19	22
最大値/最小値	23/17	26/16	26/15
ちらほりの範囲	6	10	11
人数が最も多い値	9	13	3
割合	49~21	19~21	21~23

(図10)
データを整理した表

そこで、インプット場面では、まずは個人でなく、グループで一緒にデータを見ることと、代表値を表に一つずつ整理していくことから始めた。(図10) そうすることで、苦手な児童もそれぞれの代表値の数値を理解し、「平均値」と「中央値」だけでは判断できなかったデータの傾向を見付けることができた。また、表の項目にない、割合という考え方にも目を向ける児童も現れた。

そして、自分の優勝チームを決め全体で自由に交流する活動を、本時の重点活動として設定し、その手立てとして根拠をピラミッドチャートに表した。(図11) タブレットのカードの背景を、自分の推すチームごとに統一することで、立場を明確にして交流に臨むことができた。背景の色が異なるカードをもつ、違う結論の人には、納得してもらえよう説明ができるよう、児童の意識が向いた。また、同じ背景の色のカードをもつ、同じ結論の人には、根拠をより増やすための話合いが中心となった。このような手立てを取ることで、より、活発な交流につながった。

課題として、交流の目的をより明確にするため、学習課題をより吟味しての設定することが挙げた。

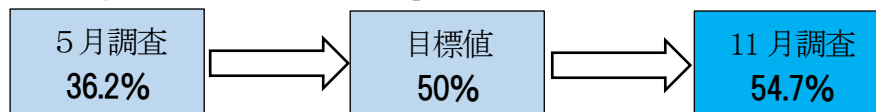


(図11)ピラミッドチャートを用いた交流の様子

Ⅱ 読解力向上をめざした新聞活用実践

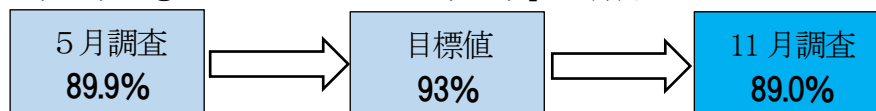
(児童質問紙) 新聞に書かれている内容に興味がありますか。

指標 8 「①ある＋②どちらかといえばある」の合計



(児童質問紙) 読書や新聞を読むことは、様々な教科の勉強に役立つと思いますか。

指標 9 「①そう思う＋②どちらかといえばそう思う」の合計



【指標の達成に向けた実践】

(1) 朝のチャレンジタイム「読み解くチャレンジ」

今年度、毎週火曜日の朝の活動として「読み解くチャレンジ」を行った。これは、教科書以外の新しい文章に触れる時間を毎週もつことと、読み取った内容に関する問題を解くことで文章問題に慣れることをねらいとした。教材として、読売新聞社発行「よむYOMU ワークシート（高学年）」と「読売ワークシート通信（低学年）」を活用した。発達段階に合わせて、教師が読み聞かせたり自分で読んだりして解いている。



6月から毎週実施してきたことで、ようやく文字数や設問形式にも慣れてスムーズに解ける児童が増えてきた一方、文章を読むことに苦手意識のある児童にとっては、意欲が続かないという課題もある。今後、児童のレベルに応じて難易度を段階的に調整するなど、個別最適化の支援を加えながら、より効果的に活用できるように検討していきたい。

(2) 日本新聞協会主催「第15回新聞コンクール」への挑戦

総合的な学習の時間においても、子ども新聞の記事を活用した実践を行った。例えば、自分の興味のある記事を選び、分かったことや疑問を自由に書いてスクラップ記事を作る実践や、記事を読んで、考えを友達と話し合い、考えを広げる活動を行う実践である。

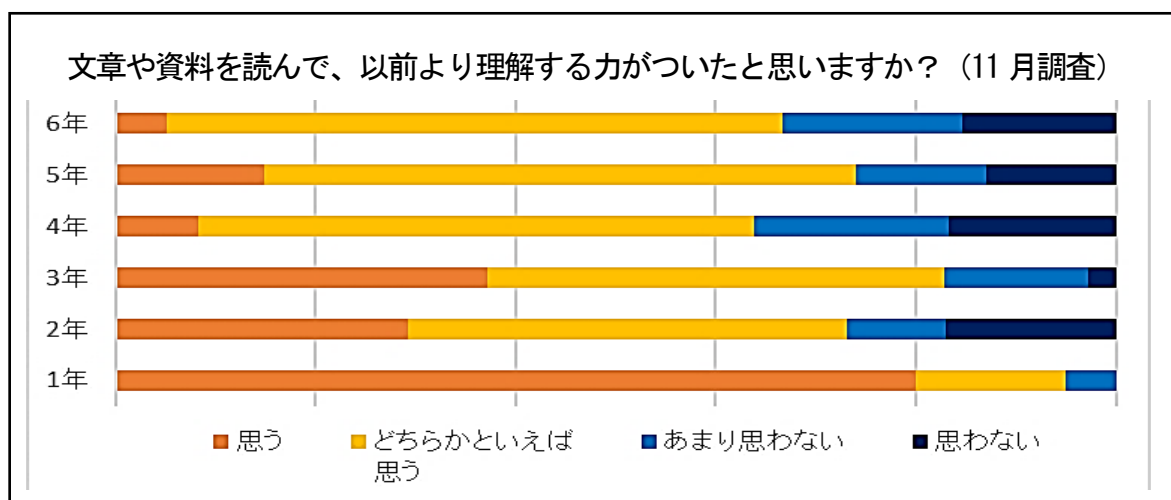
その中で、3年生以上の児童を対象に、1学期末「第15回新聞コンクール」に挑戦した。気になる新聞記事の一つを選び、自分がそれを選んだ理由と、さらに保護者と一緒に記事を読んで考えたことについて文章を書くコンクールである。その結果、本校は優秀学校賞に選出され、個人としては3名が優秀賞、1名が奨励賞を受賞することができた。これらの実績が児童の自信となり、ますます新たな文章に触れ、読もうとするきっかけにしていきたい。



Ⅳ 研究の成果と課題

【成果】

- 日ごろから様々なテキストに触れる機会をもつことができるようにしたことで、児童が学習活動において目的をもってテキスト（教科書以外の本や新聞・資料等）を活用し、進んで読むようになってきた。
- 文章を書く際、テキストを読んで分かったことと形成した自分の考えを分けて書くことができるようになったり、それらのことについて積極的に発言したりする児童の増加がみられた。
- 今年度の県学習状況調査の結果では、昨年度と比較して「読む力」が6ポイント上昇した。読解力向上に向け、全教員で授業改善に取り組んできたことと、「読み解くチャレンジ」において初見の文章を読む練習を続けてきた成果であるといえる。
- 11月調査では、文章や資料を理解する力がついたと思うか尋ねたところ、下に示すグラフのような結果となった。自分の伸びを実感していると肯定的に回答した児童が、76%もいたことは、今年度の取り組みの大きな成果である。



【課題】

- 読解力はすぐに力が身に付くものではなく、テキスト自体に苦手意識のある児童にとっては、学習活動全体を通して意欲が停滞しがちな様子がみられた。今後、そのような児童に対する支援の在り方を、個別最適化の視点から考えていきたい。
- 朝の活動や総合的な学習の実践が単発的に終わるのではなく、カリキュラムマネジメントの視点をもって、授業にも活用できるように計画的に実施していきたい。
- 読解力育成にあたり、学力調査の結果などの数値的な上昇のみをねらうのではなく、児童にとって将来的に必要な力の育成につながるよう、長期的な視野をもって、発達段階や系統性に応じた授業改善の道筋を探っていく必要がある。